

嫌われても国際協力 (15) 社会インフラ、そして人が先

20世紀におこなわれた途上国に対する開発援助では、高額機器が供与されながら、ちっとも使われないことが問題となるが多かった。使われない理由にはさまざまなものがあったけれど、その中でも電気と水の問題は大きかった。日本のように安定した電気はない。電圧は大きく変動したたびたび停電する。生活用水、飲用水にも不足するようなところで、精密な化学実験が必要とする大量の純水を確保するのは困難であった。高額新鋭機材が使われないのは、機材以前の問題も大きかったのである。

さて、本誌「海外の森林と林業」78号で森林総研の平田泰雅氏が紹介しているように森林による温暖化緩和策のREDDもしくはREDD+では、参加する国に温暖化ガス排出量を測定・報告・検証する能力がまず求められる（測定・報告・検証は英語の頭文字からMRVと呼ばれる）。国際交渉の場では、排出削減量に対する支払いについて、資金の調達や平等な配分についての議論が大勢を占めていると聞く。しかしその部分をどれだけ議論しても検証にたえる排出削減ができなければREDDの実行はおぼつかない。調達した大金が宙に浮いてしまう可能性がある。使われない高額機器の失敗を繰り返さぬよう、MRVというインフラ構築が急務である。

MRVシステムの構築に大切なのは人である。開発援助で供与された高額な分析機器が動かなかった理由には人の要素もあった。サンプルを投入すれば分析結果を示す機械があっても、サンプルを投入す

る人がいなければ、空き箱とかわらない。目的なしにサンプルをいれて得ることができるのは数字の羅列にすぎない。研究目的をたて、何をどう分析するか決める人がいて、機械は役に立つのである。最新鋭の分析機器を使いこなすには、それなりの知識と経験が必要なのである。

REDDのMRVのツールとして期待されている衛星リモートセンシングにも、化学分析機器と同じことがいえるだろう。衛星画像の解析にはいくつものステップが必要である。衛星画像にもさまざまな種類があり、それぞれに長短がある。技術の進歩により、衛星画像解析の結果は多くの人々の目にとまるようになってきているけれど、2010年現在、衛星画像解析には一定レベルの知識を有する専門家による作業を必要とする。お金を出しさえすれば、衛星画像とコンピューターと解析ソフトを買うことはできる。しかし購入した画像を使って森林の状況を把握するには、衛星画像解析の能力をもつ人が必要である。衛星画像解析ができる人がいないのに、画像やソフトを買い込むと、使われないまま古くなってしまったソフトと、整理が悪くて使い物にならない衛星データがあちこちに散在するような事態になりかねない。発展途上国でMRVシステムを構築するためには、衛星画像の購入だけでは不十分で、衛星リモートセンシング技術者の増員と能力向上を急がねばならない。

（森林総合研究所 国際研究推進室長 藤間 剛）